

志賀高原・地獄谷の植物採集

渡 辺 隆 一

昭和54年10月27・28日、長野県植物研究会の例会を長野県東北部・下高井郡山ノ内町志賀高原でおこなった。参加者は奥原弘人、北村英一、堀込富平、松田行雄、小林富雄、丸山利雄、馬場多久男、古谷義人、古谷芳枝、堀込和雄、尾台喜貞、平林陸男、小口好久、楯誠治、望月精一の諸氏と、幹事の渡辺の他に、地元の春原弘氏が参加し総勢17名の盛会であった。春原氏は志賀高原にある京大ヒュッテの主人で、当地の植物を長年にわたり調べておられ、春から秋までは東館山にある高山植物園の管理と訪問者への植物解説を行なっている。

今回の調査は、蓮池（標高約1500m）から上林温泉（750m）までの志賀高原の下半部、ほぼ冷温帯林の上部から下部までに相当する。

第1日（10月27日）付近を自由に散策し夕方には私立学校共済組合のやまゆり荘に集まる。自己紹介や楽しい歓談でなごやかな夕食となった。部屋では明日のコース説明と春原氏から、明日の採集で期待できそうな植物、ヤチアザミ、ホソバツルリンドウ、アズマツメクサ、ツチアケビ、ミヤマツチトリモチ、イチョウバイカモ、メグスリノキなどの説明があった。その後、渡辺のスライドによる志賀高原の花のいくつかの紹介があった。いろいろな植物をめぐる情報の交換など話題はつきなかった。

第2日（10月28日）気持よく晴、8時半に宿を出た。シラカンバ、ダケカンバの黄葉はもう盛りも過ぎ、晩秋の朝の空気はひどく冷たい。各自野帳をとったりしながらズミの大木があるピワ池の湿地に着いた。もう大半は枯れたヤチアザミやベンケイソウなどを採集した。ピワ池にそった黄葉したカンバの林の遊歩道を歩き、エゾユズリハ、ヒメアオキ、ヒメモチといった、このあたりが分布の上限にあたる冷温帯林の低木を採集した。ハウチワカエデ、コハウチワカエデの紅葉を見比べる。ピワ池のふちで、セイヨウミヤコグサの花を見つけ志賀高原の帰化植物がまた増えた。道傍に、ネズミムギとホリムギが生えており、その雑種と思われるネズミホソムギも見られた。水無池の湿地でミズゴケ類を教えてもらう。仏岩へのタムシバの多い道を行き、ジンヨウイチヤクソウ、イチヤクソウ、マルバイイチヤクソウをそれぞれ見比べる。展望台からは遠く北アルプスが

眺められて一通り山の名をなぞってみた。美しく染まった紅葉の志賀の山々を眺めながら仏岩上での昼食。午前中の採集品についての話でにぎわう。

仏岩の急な下りになると、アズマシャクナゲの大木やタカノツメ、オノオレカンバ、ウスユキハナヒリノキなど出るが、ひたすら慎重に足元を見て鉄ばしごを降りる。下りきると植生はがらりと変わり、サワグルミ、トチノキ、カツラ、ケヤキなどの大木が林立する落葉広葉樹林の横湯川沿いの湿った平らな道をたどる。色づいた葉がしきりに舞う林の中をミヤマイラクサ、カメバヒキオコシ、ジャコウソウ、エゾアジサイなどを見ながらいくつもの沢を横切っていく。志賀高原の上部では見られない、タマアジサイ、ダンコウバイ、マツブサ、ミツバアケビ、フサザクラ、ハクウンボク、モミジイチゴ、フジキ、クサギ、カラムシ、フジ、ルイヨウボタンなどができてにぎやかな感じとなる。

急な下りを一気に降りると、温泉にはいるサルで有名な地獄谷に出た。天然に蒸気が噴きでている大噴泉を見て上林にむかうスギ林の道を行く。もう見慣れた人里の植物が多くなり、道わきのヌルデ、クワ、ウツギなども多少色づき、ミヤマニガウリの実がぶらさがっているのにも出会った。

上林では、この夏にできたばかりのベゴニアガーデンの大温室を見学させてもらった。確かに美しい花々が多かったが、一行にはやはり野外の植物の方に愛着を感じるようである。

解散時間も迫り、一行は最後のポイント、イチョウバイカモのある料金所へ急ぐ。流水の中には生育のよいものがあり、一同しばらく手に取って見る。そこがバス停なので少々あわただしい解散となる。

その他多くの植物が見られたが、シダ類は以下のようなものである。オシダ、ホソバトウゲシバ、ヤチスギラン、ミヤマベニシダ、シノブカグマ、イワハリガネワラビ、オオバショリマ、ナライシダ、ミヤマイトチシダ、サカゲイノデ、コタニワタリ、ハコネシダ、コウヤコケシノブ、ホソイノデ、トラノオシダ、イワガネゼンマイ、オオレンシダ、ハクモウイノデ、ミヤマシゲシダ、オサシダ、リョウメンシダ、ヤマヤブソテツ。